

平成 26 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：2014年4月～2015年3月

※今年度の年次報告書は担当者の名前、メールアドレス、添付資料を除き、HP等で公表します。また、ユネスコスクールの質の確保の観点から、報告書の内容が一定の基準に満たないもの、報告書が2年連続して未提出の場合には、ユネスコスクールの認定取消を勧告させていただくことがありますので、あらかじめご了承ください。

1. 学校概要

学校名 宮城県角田市立東根小学校

種別  保育園・幼稚園  小学校  小中一貫教育  
 中学校  高等学校  中高一貫教育  
 教員養成  技術/職業教育  
 特別支援学校  その他 ( )

住所 〒981-1533  
宮城県角田市平貫字前河2

E-mail : higashine-es@kakuda-c.ed.jp

Website : //www.kakuda-c.ed.jp/higashine-es/

児童生徒数：男子 18名 女子 31名 合計 49名  
 児童・生徒の年齢 7歳～12歳

2. 担当者 ※公表しません

3. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか（地域遺産：福應寺奉納〈ムカデ〉絵馬）

#### 4. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

## 平成26年度 校内研究の概要

- 1 研究主題 進んで学びをつなげ、広げ、深める子どもの育成  
(2年次／2年)  
副題 ESDの考え方に沿った授業づくりを通して

### 2 主題設定の理由

#### (1) 教育の今日的課題から

これからの時代を担う子どもたちには、変化の激しい社会の中で、幅広い知識を基盤として思考力・判断力・表現力等を柔軟に働かせながら、ものの見方や考え方が違う様々な人々と共存していく能力を身に付けることや、一人の人間として自立し、社会の中心的な形成者としての役割を果たしていくことが求められている。このことは、人格の発達や自律心、判断力、責任感などの人間性を育むことや、他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を尊重できる個人を育むことを目的とした、持続可能な社会づくりの担い手となる個人を育成する教育(=持続可能な発展のための教育、以下ESD)と大きく重なるものである。また、学習指導要領においても「持続可能な社会の構築」の観点が盛り込まれ、ESDの考え方に沿う教育を行うこととなった。そこで、各教科で積み上げた基礎的・基本的な知識・技能を踏まえ、社会の現実的問題に臨んでいく授業、各教科の知識・技能を横断的・総合的に活用し実践していく授業を創造する必要があると考えた。

#### (2) 学校教育目標の具現化から

本校では「知・徳・体の調和のとれたたくましい児童の育成」を教育目標として掲げ、「学び合う子ども=基礎・基本を身に付けるとともに、自分の考えをしっかりと持ち、学び合い高め合う子ども」「支え合う子ども=基本的な生活習慣を身に付け、豊かな情操と感謝の心をもつ子ども」「きたえ合う子ども=目標をもち、基礎となる体力を培うとともに、進んで勤労に励む子ども」を育てることを目指している。特に、平成21年のユネスコスクール加盟以降は「ESDの考え方に沿った教育活動の在り方の探求」を重点努力事項の一つに位置付け、主に総合的な学習の時間や特別活動において、探求や実践を重視した体験学習を展開してきた。平成24年度には、木造教室棟建設に伴う一連の学習活動が認められ、第3回ESD大賞「小学校賞」に選出された。

一方、今後は児童の減少に伴う小規模化・複式学級化が進むことが分かっており、児童一人ひとりの個性や特性に応じた指導がしやすい反面、児童同士の高め合いや学び合い、社会性の醸成、自立心や社会性の育成等の面で課題が生じることが懸念されている。そこで、学んだことを生かして新たな問題を解決したり友達と考えを出し合ったりする中で、共に学ぶ楽しさや成就感を体得するとともに、新たな意欲を持って主体的に学習に取り組む児童を育てることが必要であると考えた。「進んで学びをつなげ、広げ、深める子ど

もの育成」という研究主題を掲げた本研究は、まさに本校の教育目標の具現化につながるものであると考える。

### (3) これまでの研究の経過と児童の実態から

本校では、一昨年度まで「確かな学力を身に付けた児童の育成～数学的な思考力・表現力を育てる算数的活動の工夫」という研究主題のもと、算数科を中心に3年間の研究を進めてきた。その結果、問題把握の場面、自力解決の場面、考えを出し合い学び合う場面などでの指導の工夫が授業実践を通して提案され、大きな成果が得られた。そこで、昨年度は、これまでの研究で有効だった指導方法を継承しながら、算数科以外の教科、領域の指導においても思考・表現活動を通して多面的に考察する力や問題解決の力を育てていくことを目指し、本研究主題を設定して授業実践に取り組むことにした。

平成24年4月に実施した全国学力・学習状況調査の質問紙調査では、多くの児童が「総合的な学習の時間」の授業で学習したことは普段の生活や社会に出たときに役に立つと思っていること、普段の授業の中で自分の考えを発表する機会や友達との間で話し合う活動は多くあるが、自分の考えを他の人に説明したり文章に書いたりすることは難しいと思っていること、などが分かった。また、自然の中での遊びや自然観察の経験が乏しく、理科の学習を実生活や実社会に結びつけて考えている児童が少ないということも分かった。(資料1)

本校の児童は、全体的に意欲的で、与えられたことや指示されたことに対しては真面目に取り組む姿が見られる。しかし、小さいときから少人数の同じ集団で生活しており指導や支援の手が行き届きすぎためか、自ら進んで課題の解決に取り組んだり、創意・工夫をしたりすることが苦手な児童が多い。したがって、基礎・基本の知識・技能を身に付けさせるにとどまらず、自分で考え、進んで課題を解決していこうとする意識を育てていく必要がある。児童一人ひとりに問題解決の過程をじっくり歩ませ、その過程の中で自己の学びに価値を見いだせるようにしたり、実生活や実社会における各教科の活用の在り方や実際の応用の仕方について体験的にとらえさせたりするような学習指導が重要であると考えた。

## 3 主題・副題のとらえ方

### (1) 主題について

主題について、次のように定義する。

- ・学びをつなげる＝ 課題について、その教科や他教科・領域等における既習事項をもとにして解決したり、その結果を次の課題解決に生かしたりすること。
- ・学びを広げる＝ 課題解決の課程で新たな課題に気づき、多面的に課題に迫っていくこと。
- ・学びを深める＝ 課題について自分で考えたことをより明確にするために、多様な根拠を追求したり、他者と関わったりすること。

### (2) 副題について

E S Dの考え方に沿った授業とは、学習内容を持続可能な社会づくりの視点からとらえて学習活動を展開することである。本研究では、E S Dのねらいを「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力・態度を身に付けること」とおさえ、このねらいの達成に向

けた授業設計や授業改善を行うことを目指す。

具体的には、次のような点に留意することが大切であるとする。

- ・ 人や社会、自然との「かかわり」「つながり」を重視すること
- ・ 単に知識、技能の習得や活用にとどまらず、児童の体験や実践を重視すること
- ・ 児童の自発的かつ具体的な行動を促すことを重視すること

#### 4 研究目標

ESDの定着と充実に向けた年間指導計画の見直しと教材開発を通して、ESDの考え方に沿った指導方法の在り方や評価の在り方などを明らかにする。

#### 5 目指す児童像

- ・ 学びをつなげる子ども = 課題について、既習事項をもとにして解決したり、その結果を次の課題解決に生かしたりできる子ども
- ・ 学びを広げる子ども = 課題解決の課程で新たな課題に気づき、多面的に課題に迫っていくことができる子ども
- ・ 学びを深める子ども = 課題について自分で考えたことをより明確にするために、多様な根拠を追求したり、他者と関わったりできる子ども

#### 6 研究の視点

「学校におけるESDに関する研究（国立教育政策研究所）」によれば、ESDの視点に立った学習指導を進める上で重要なことは、①教材（学習課題、学習内容）を内容的・空間的・時間的につなげること、②学習者同士、学習者と他の立場・世代の人々、学習者と地域・社会などをつなげること、③身に付けた能力や態度を具体的な行動に移し、実践につなげること、であるとされている。そこで、本研究においては、主題に迫るための視点を以下の3つに焦点化し、研究実践を進めることとする。

【視点Ⅰ】 教材のつながり（学習の系統性や連続性を明確にした指導の工夫）

ア ESDの考え方に沿った教科・単元の指導内容の分析と見直し

イ ESDカレンダー（資料4）の作成と活用

【視点Ⅱ】 人のつながり（人や地域との関連性を明確にした指導の工夫）

ア 地域教材の開発と地域人材の活用

イ 参加体験型の単元構成の工夫

ウ ESDマップ（資料5）の作成と活用

【視点Ⅲ】 能力・態度のつながり

（育てたい能力・態度を明確にした指導の工夫）

ア ESDで重視する能力・態度を位置づけた学習展開と指導過程の工夫

イ ESDシラバス（資料6）の作成と活用

#### 7 研究計画

##### （1）年次計画

1年次 研究主題・副題の設定 全体構想の策定 実態調査の考察

年間指導計画の見直しとESDカレンダー等の作成  
 研究の視点に基づいた授業実践 研究授業の検証と評価  
 2年次 研究の視点に基づいた授業実践 ESDシラバスの作成  
 実態調査の考察 研究のまとめ

(2) 本年度の研究内容と方法

- ①研究の視点に基づいた授業実践を行い、その検証と改善を行う。
  - ・一人一回以上の研究授業（事前検討会、研究授業、事後検討会）
- ②学力向上成果普及マンパワー活用事業や大学連携事業等を活用し、指導法に関する研修を深める。
- ③児童の意識調査を行い、児童の実態と変容について分析する。

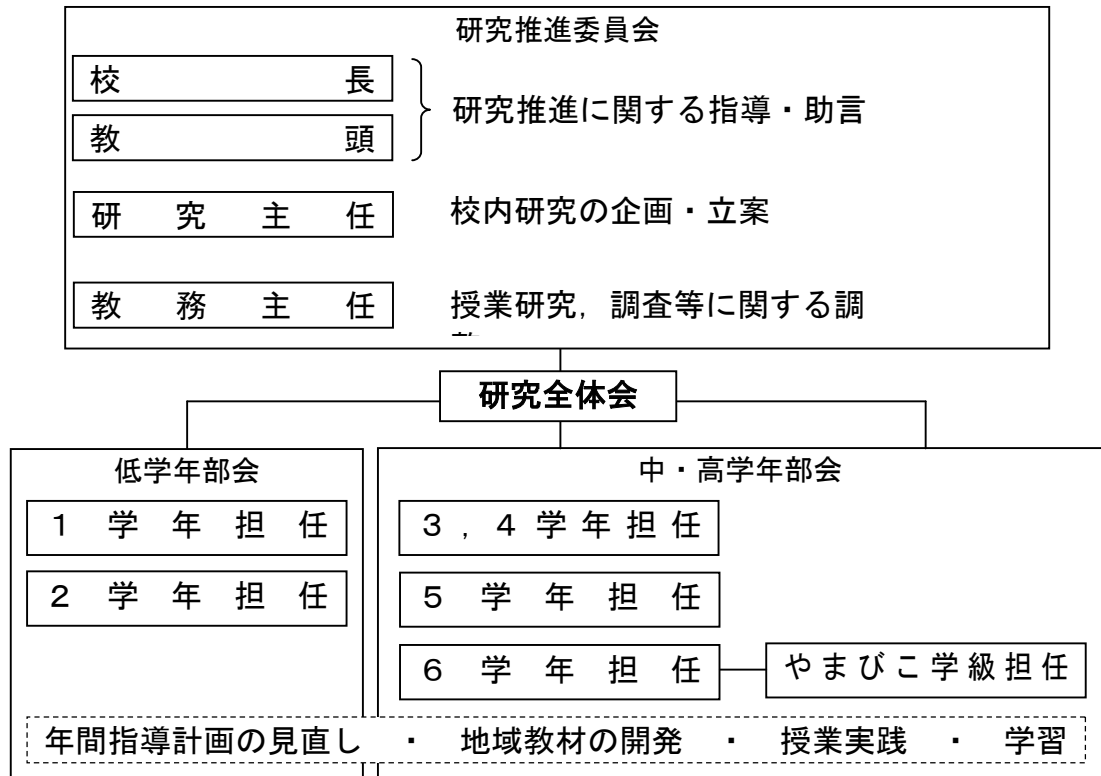
(3) 本年度の研究の検証と評価の視点

- ・日常的な学習指導における児童の成績物（ノート、ワークシート）の累積と変容の記録
- ・全国学力・学習状況調査における児童の意識の変容（資料2）
- ・総合的な学習の時間に関する意識調査による児童の意識の変容（資料3）

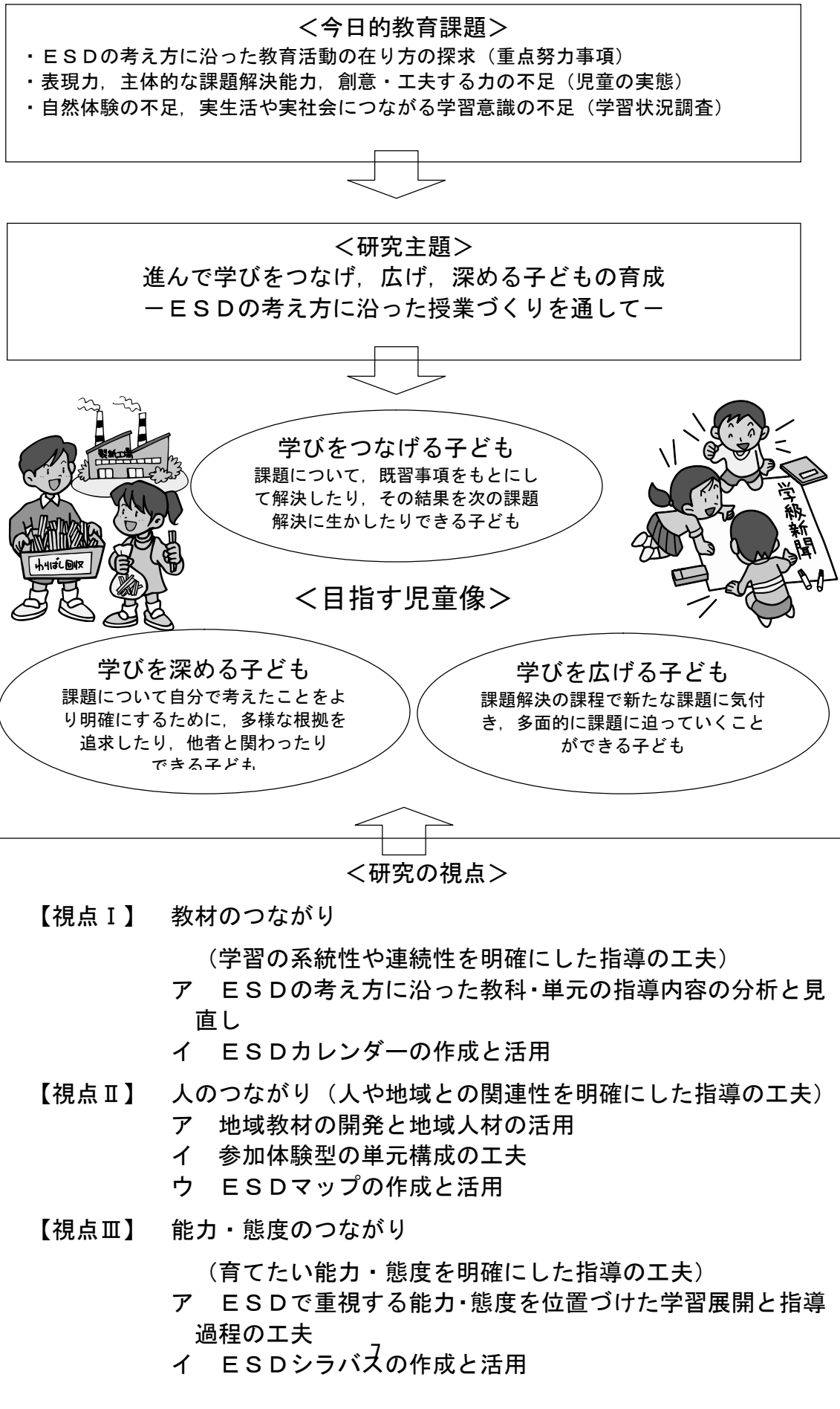
(4) 本年度の研究日程

月	内 容	月	内 容
4	4/ 4 全体会（今年度の計画） 4/16 角田市標準学力調査 4/22 全国学力状況検査	10	10/10 授業研究（高学年） 10/21 授業研究（中学年） 10/28 県学力検査
5	5/ 2 児童の意識調査 5/28 授業研究（高学年）	11	11/19 授業研究（低学年）
6		12	12/24 全体会（授業実践記録の作成）
7	7/24 学力向上マンパワー活用研修 7/28 校内研修（ESDシラバスの作成）	1	1/27 授業研究（特別支援）
8	8/22 伝講会・指導案検討会	2	2/ 6 校内研修・研究のまとめ ※島野智之氏招聘（法政大教授） 2/20 児童の意識調査
9	9/25 指導主事学校訪問	3	3/ 3 全体会（研究の検証と評価） 3/25 「研究のまとめ」完成

## 8 研究組織



## 9 研究全体構想図



## 10 研究の成果と課題

### ◎ 平成26年度（2年次）

#### 【成果】

- ・ ESDシラバスの作成を通して、各教科、総合的な学習の時間、特別活動等で育てたい態度や能力を意識した年間指導計画の見直しを図ることができ、ESDの考え方に沿った授業づくりに役立った。
- ・ 単元の学習計画に、他学年や児童センターの児童との交流、自治センター、農協等の地域組織、博物館等の関係機関との連携を積極的に位置づけ、他者との協働による授業づくりを行ったことで、児童の主体的な学習を促すことができた。
- ・ 問題解決の過程にグループ学習を取り入れることによって、学習活動への意欲を高めるとともに、人間関係やコミュニケーション能力の向上につながった。グループ学習による集団思考は、授業を活性化させるだけでなく児童個々の学習を深めていくことが分かった。
- ・ 社会科の学習では、単元の学習計画に家庭や社会との結び付きを重視した題材（食料生産と消費、地域の歴史等）を工夫したり開発したりすることで、児童の実践的な学習態度が育まれることが分かった。

#### 【課題】

- ・ 関係機関や施設を利用したり、体験的な活動したりするには、事前の準備や移動など年間指導計画の配当時数以上の時間がかかるため、内容の精選や計画の工夫が必要であった。
- ・ 調べたことや考えたことを、根拠や解釈を示しながら説明できるようにするなどの言語活動を意識した授業を展開するためには、話し合い活動を焦点化したり、話し合いの方向を明確にしたりするような発問の吟味や工夫が必要であった。

## 11 研究のまとめ

平成14年に日本政府が国連総会で提案し採択された「国連ESDの10年」は、平成17年から始まり今年（平成26年）が最後の年となる。その間、平成20年に文部科学省が策定した第一期教育振興基本計画にはESDは「我が国の教育の在り方にとっても重要な理念の一つ」と明記され、同年に改訂された学習指導要領にも、持続可能な社会づくりというESDの視点が盛り込まれた。本校も、平成21年以降、ユネスコスクール加盟校として「ESDの考え方に沿った教育活動の在り方の探求」に努めてきたが、昨年度と今年度の校内研究により、学校全体でESDの研究に取り組んだことで、教職員のESDへの理解がさらに深まった。また、ESDの実践を積み重ねることによって、授業や単元にESDの視点を導入する方法が分かってきた。特別支援学級による実践でも、ESDで重視される「地域とのつながり」という概念が、共生社会を目指す特別支援教育においても重要な柱であることを確認できた。

ESDを取り入れた授業を重ねることで、児童の学びの姿勢も変わってきた。学んだことを踏まえて地域や自分を見つめ直すとともに、自分の考えや意見を持って進んで地域や地域の人と関わり、思いや考えを伝え、自分のふ



るさとしてこの地域をつなげていこうと意識する児童が多くなった。

**【視点Ⅰ】 教材のつながり（学習の系統性や連続性を明確にした指導の工夫）における成果**

参考文献による校内研究や、法政大学教授（前宮城教育大学准教授）・島野智之氏の講話などを通して、教師全員がESDの考え方、視点を理解するようになった。また、ESDカレンダーの作成により、ESDの考え方、視点が各教科・領域のどこにあるか、またそれぞれがどう関わっているのかが分かり、長期的な見通しを持った学習指導ができるようになった。

**【視点Ⅱ】 人のつながり（人や地域との関連性を明確にした指導の工夫）における成果**

人と人とのつながり、人と地域とのつながりを意識するようになって、人材や関係機関の活用を積極的に行うようになった。また、ESDマップの作成や、参加体験型の単元構成の工夫により、教師が地域をよく調べ、活用できる資源、人材を開拓するようになった。

**【視点Ⅲ】 能力・態度のつながり（育てたい能力・態度を明確にした指導の工夫）における成果**

ESDの視点を取り入れた学習指導案やESDシラバスの作成を通して、ESDで重視する能力・態度を学習展開と指導過程に明確に位置づけることができた。このことにより、児童への発問や教材提示、学習形態、具体的な体験活動が一層工夫され、児童はこれまでにない発見や気づき、発言をするようになった。また、学習する対象への興味・関心をさらに高めたり、人や地域に積極的につながろうとしたりする児童が出てきた。児童に地域への愛着心が育まれてきたことを感じた。また、学習したことを別な教科や活動で活用したりつなげたりするなど、今まで気付かなかった学習や活動との関わりを意識する児童も出てきた。

**【児童の変容】**

① 全国学力・学習状況調査 児童質問紙調査の結果から

平成24年度調査（資料1）と平成26年度調査（資料2）では、質問の項目が若干変更されているため、すべての項目について比較することはできなかったが、「総合的な学習の時間で学習したことは役立つか」「授業における発表の機会が与えられていたか」についての意識に関しては、大きな変化はなかった。しかし、「学級の友だちとの間で話し合う活動をよく行っていたか」「自分の考えを他の人に説明したり文章に書いたりすることは難しいか」という2つの項目では、肯定的な回答をした児童の割合が大幅に増加しており、ESDの考え方に沿った授業づくりの成果が表れていると考えられる。一方、平成26年度の項目「学級の友だちとの話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができているか」という質問に対して、肯定的な回答をした児童は50%であったことから、言語活動の充実に一層力を入れていく必要があると考えられる。

② 「総合的な学習の時間」に関する児童の意識調査の結果から

3回の意識調査から、児童は「総合的な学習の時間」を中心とした学習活動において、直接的な体験を通じた学びや、友だちや地域の人々との関係な

